

25) 野口英世の歯科医学叢談・歯科学 報投稿論文について

Dr. Hideyo Noguchi's Articles Contributed
to Shikwaigaku-Sodan and Shikwa-Gakuho

東京歯科大学 森山 徳長

○亀谷 博昭

塩津 二郎

真木 吉信

奥田 克爾

Norinaga Moriyama, Hiroaki Kametani, Jiro
Shiozu, Yoshinobu Maki & Katsuji Okuda,
Tokyo Dental College

演者らは第16回本学会学術大会以降、野口英世の微生物学的諸業績について発表してきた。また微生物学領域以外でも、渡米前に東京歯科医学院で病理学・薬物学を講じた外に、歯科法医学についても講義したことを報告した。

野口は明治29年9月に郷里を出て医術開業前期試験に合格したが、学費がつきて血脇守之助を訪れたのは11月3日であった。それ以後高山歯科医学院の学僕となり、血脇の庇護のもとに済世学舎に学んで翌秋医師免許を獲得した。

その後、夜間高山歯科医学院の講師をつとめながら11月から順天堂医院の助手として順天堂医事研究会雑誌の編集にたづさわった。その頃同誌に発表した症例報告と、歯科医学叢談に掲載された論文21編については、丹実編野口英世その生涯と業績第3編業績に載っているが、今回われわれの精査したところでは叢談誌と改題した歯科学報に、S.N.生、野口清作、湖柳生、野口英世の名で発表された論説・抄録などは、医師資格取得前から計18編に上ることが判明した。

発表論文の編数と年月：

3編——2巻1号——30年1月

2編——2巻2号——30年3月

2編——2巻3号——30年5月

2編——2巻4号——30年7月

3編——2巻5号——30年10月

1編——3巻2号——31年4月

2編——3巻4号——31年8月

2編——4巻2号——32年4月

1編——6巻3号——34年3月

著者名：ペンネーム『湖柳』を用いたものが最も多く9件、野口清作2件、会陽 S.N. 生1件、S.N. 生4件、野口英世2件である。最初2巻1号には会陽 S.N. 生訳とあり、その次に湖柳生を多用し、3巻4号（明31年8月・この時改名の手續をとっている）で野口清作名で論説2編、その後は4巻2号で野口英世演、湖柳生述の署名で学説欄に2編を寄稿している。

掲載欄：学説—3，論説—4，実験—4，雑録—3，抄録—3，歯科衛生—1

表題・内容：医師免許を取得した明治30年10月までの（2巻1～5号）12件は、いずれも2～3頁の短い実験（症例報告）、抄録、雑録等で外国文献の翻訳である。2巻1号に最初に載せた学説も『乳歯ノ治療ニ就テ』という4頁の翻訳である。ただし、注目すべきは2巻2号の『るよんどげんX光線ヲ応用シテ軟生齒ヲ発見セシ一例』は、わが国で歯科X線診断について記載した初めての文献であることである。この事については別に詳細を発表する。

医師の資格を得た後は、巻頭に掲載する機会が多くなる。3巻2号（31年4月）には湖柳生訳で『露国ニ於ケル 歯科医術』5頁、3巻4号（31年8月）には野口清作名で、下顎半折除と頬・歯齦肉腫の順天堂での症例報告2件（順天堂誌と重複）を5頁、4巻2号（32年4月）では野口英世演『口腔の腫瘍に就きて』湖柳生述『歯科ト耳科トノ関係』の2編の学説を掲載した。もっとも、血脇が31年7月から1ヶ年渡清し、その間石塚三郎と共に雑誌編集をまかせられていた事情もある。

最後に、改題後の歯科学報6巻3号（34年3月）の学説欄、巻頭野口英世『古代ニ於ケル 歯科医術』（5頁）は置き土産である。

まとめ：在来知られていた渡米前の野口の著作は、丹実によると順天堂医事研究雑誌に掲載された症例報告19編、歯科医学叢談寄稿2編および

『病理学的細菌学的検究術式綱要』とされていた。

演者らは歯科医学叢談・歯科学報に野口英世が発表した論説や抄録が18編にも達することを発見したので、東京歯科大学草創期の機関説に密接な関係を持っていた野口の業績を、解析して報告したいと思う。

26) 最初期 X 線診断学に関する内外 文献の考察

Studies on the Earliest Literature on the
X-ray Dental Diagnostics in this Country
and Abroad

東京歯科大学 森山 徳長
○塩津 二郎
奥田 克爾
高添 一郎

Norinaga Moriyama, Jiro Shiozu, Katsuji
Okuda & Ichiro Takazoe, Tokyo Dental
College

(湖柳生・野口英世の最初の紹介)

R.C. レントゲンが X 線の原理を発見したのは1895年11月8日のことであった。そして12月28日ベルリンの物理学会発表後半年も経ないうちに、歯科領域にも X 線診断学の手法が開発導入された。

わが国で初めてそれを紹介した論文は、レントゲン線発見2年4ヶ月後、明治30年(1897)3月発行の歯科医学叢談誌上に現れた。題して『るよんどげんX光線ヲ応用シテ飲生齒ヲ発見セシ一例』、筆者は湖柳生とあった。

このペンネーム湖柳生が何人であるかは、当時は別として、その後1世紀近い長い期間明らかにならなかった。

明治34(1901)年8月の歯科学報に、茅野柳次郎がX線の理学的性状や装置についての本格的な論説を発表しているので、この茅野が湖柳生ではないかとの推論を、第11回目日本歯科医学会総会々頭講演で鈴木勝先生が述べている。(日本における歯科レントゲン学の歩み——歯科放射線7・

8 巻合併号1966・7年)

その後明治42年4月に、東大歯科で勉強中の遠藤至六郎が、土肥教授に師事して『歯科診療上のX線の価値について』を歯科学報に発表した。

明治45年にドイツでX線学を研究して帰朝した藤浪剛一教授が、東京歯科医学専門学校に招かれて学生に講義し、照内昇と共著で「歯科学講義」に連載し、大正6年完結して歯科学全書形式の教科書となった。大正年代に、歯科医でレントゲン学を専攻したのは照内昇が初めて、その他青木貞亮、岡田満らが続いた。

昭和に入って、成書として青木貞亮『歯科レントゲン図譜(昭6)』『歯科レントゲン学(昭10)』、照内昇『レントゲン歯科学(昭15)』が出版され、臨床科目として認知されるにいたった。

最近の歯科X線学の進歩はいちじるしいが、成書でX線の初期の歴史を記載したものは2、3しか無く、それも鈴木論文の部分的孫引き程度である。

演者らは東京歯科大学100年史研究の一環として、野口英世の初期の業績をいろいろ調査し、歯科医学叢談に野口清作、S.N.生、湖柳生、野口英世(改名は明治31年夏)の名で、長短18編の寄稿を行っていることを解明した。

(野口湖柳抄訳論文の原著)

歯科医学叢談実験欄の野口訳の原著は、Dental Review 11巻1897年1月号22~23頁に掲載された、ジョージア州アトランタ在住のCatching's Compendium of Practical Dentistryの編集長B.H. Catchingの“Roentgen X Ray Finds A Missing Tooth”で、挿図1枚付きである。

「19歳のMiss G.R. 上左中切歯の弛緩を訴えて来診、乳歯交換期のように動揺あり。髓腔に探針を入れても無痛で出血多く、根管1/3位の部分に埋伏歯らしき障害物があり、左右に少し滑走する。埋伏歯を疑って歯列を見ると、左犬歯が欠如している。それでX線検査の必要を説き帰宅させた。

翌日F.P. Catching B.S. の10インチ感応コイルと、Thompsonの複焦点10インチ管を用い、1分間の露出で、立派で明瞭なX線像が得られ、犬